HOKKAIDO UNIVERSITY

Title	龍谷大学におけるTA制度
Author(s)	四ツ谷, 昌二
Citation	高等教育ジャーナル, 8, 47-50
Issue Date	2000
DOI	https://doi.org/10.14943/J.HighEdu.8.47
Doc URL	https://hdl.handle.net/2115/29700
Type	departmental bulletin paper
File Information	8_P47-50.pdf

Hokkaido University Collection of Scholarly and Academic Papers : HUSCAP

龍谷大学における TA 制度

四ツ谷　晶二*

龍谷大学理工学部

Teaching Assistant System in Ryukoku University

Shoji Yotsutani**

Department of Applied Mathematics and Informatics, Ryukoku University

Abstract— This is a report on the teaching assistant (TA) system in Ryukoku University, which started in a full-scale way as the first in Japan in 1989. The aims of the system are as follows:
(1) as a means of support for graduate students,
(2) improving and developing the academic level of graduate students,
(3) promoting exchanges between graduate students and undergraduates.
The problems are
(1) the scholastic ability of graduate students,
(2) how to secure TAs.
(3) troublesomeness of the clerical work needed for employing a large number of TAs.

(Received on December 20, 1999)

はじめに

1998 年教授法研究班のアンケートに対する回答を龍谷大学より提出したところ, 龍谷大学の TA の制度に研究班の方々に興味をもっていただきました。

本稿は, 1998 年 11 月に開催された教授法研究班の研究会でお話いたしました内容の抜粋です。アンケートの回答に当たっては教員間の意見の調整を行いました。しかしながら, 本稿の内容については, できるだけ正確な情報を伝えるように努力いたしましたが, 私の個人的な独断や思い違いがふくまれている可能性があります。この点をご諒解の上, お読み下さい。

1. TA 制度について

龍谷大学は滋賀県ならびに大津市の誘致を受けて, 1989年, 大学創立 350 周年記念事業の一環として, 新たに, 大津市瀬田に理工学部, 社会学部を開設いたしました。従来から京都の大宮学舎, 深草学舎にある文化系の学部と共に, その後, 瀬田に国際文化学部も開設され, 学生数が約 15,000 人の総合大学として現在

*) 連絡先：520-2194 瀬田市 龍谷大学理工学部
**) Correspondence: Department of Applied Mathematics and Informatics, Ryukoku University, Seta 520-2194 JAPAN

に至っています。

理工学部は，数理情報学科，電子情報学科，機械システム学科，物質化学科の計4学科で入学定員は，100名，80名，80名，80名でスタートしました。途中，臨時増募で約20%増えています。1993年に修士課程（入学定員25名），1995年に博士課程（入学定員3名）が設置されています。理工学部全体の創設責任者は，情報学で著名な坂井利之教授です。私の所属する数理情報学科の設立責任者は，故山口昌哉教授です。設立の準備から，第1号の博士を出すまで育てあげられました。

理工学部創設にあたり坂井初代学部長は，教員の研究設備・環境の充実，最新鋭の設備の導入による少人数教育の実現，奨学金制度の充実等，さまざまな斬新な制度を企画・立案・実行いたしました。そのうちの一つがTA制度です。

ご承知のように，米国では，一種の奨学金の制度として既に確立されており，それにより大学院生は勉学を続けることができます。日本において本格的にTA制度を導入したのは，1989年の龍谷大学です。理工学部のTA制度の導入と同時に，社会学部も小規模ながらTA制度の導入を行いました。その後，国立大学においても導入され，現在では多くの大学にTA制度が存在します。

呼び名はTA制度といいましても，実態は，個々の大学，担当教員により全く異なっているようです。したがって，お互いに，よりよい制度を作り上げていくために，各大学の情報交換を行うことは非常に大切なことです。

2. TA制度のねらい

なぜTA制度の導入したのかということですが，大きな理由は次の3つに尽きると思います。

(1) 大学院生の「奨学金」
(2) 大学院生の資質向上
(3) 学部学生と大学院生の交流促進

各項目について，もう少し具体的に説明します。

(1) 大学院生の「奨学金」　外で低賃金で働くより，大学の中でよい条件で仕事をすることは時間を効率的に使うことができるので，研究時間が確保でき「奨学金」の役目を果たすことができます。

(2) 大学院生の資質向上　多くの院生にとって，大学まではほとんど教えられるばかりでしたので，後輩に教えるということはとても楽しいことです。自分の研究時間はとられますが，後輩から尊敬されるということはとても大きなことで，人間的にも大きく成長します。よく言われるように，人に教えるということは，知識を学び獲得する最も効率的な方法の1つです。学部のときに習って理解が不十分であったことも，TAとして教える側に立つことにより，はっきりと理解でき，さらに自分の研究に自由に応用できるようになります。

(3) 大学院生の資質向上　演習を通じてのTAとの交流をきっかけに，熱心な学生は，院生の実験室に質問の為に出入りするようになります。特に試験前になると，それまで見たこともない学生までついてきて，一緒に質問に来て試験勉強しています。研究室の雰囲気も分かり親しみがわき，優秀な学生が卒業研究・大学院進学にその研究室を選んでくれるという副次的な効果もあります。

(1) については，どの大学にも共通だと思います。(2), (3) については，大学ごとに考え方が異なってくるところです。龍谷大学では，(1) は当然として，(2), (3) の側面も大変重要視しています。

創設当初は，大学院生がいませんでしたので，京大・阪大・神戸大等の院生にTAを依頼いたしました。教員はTAに来た院生と共同研究ができ大きなメリットがありました。実際，当時TAだった多くの院生が活発に学会で活躍しています。ただ，(3) については，外部依存では時間的な制約から十分ではありませんでした。

1993年の大学院設置後は，(1), (2), (3) をねらいとした，TAが本格的にスタートしました。

3. TA制度の実績

では，具体的に実績について，1997年度を例にとり，ごく簡単に説明します。1997年度の理工学部のTAの総人数は約200人です。一人当たり年間計4コマ程度，TAとして働いています。ただし，1コマ＝90分×13回（半期週1回）です。言い換えると，講義期間中は，常に毎週180分～270分（年間20万～30万円程度），TAとして働いています。TAへの支払い総額は，非常勤講師へ支払いの総額の数倍という

ことです。このことから，大学として，TA に力を入れていることがうかがえます。なお，社会学部の方は，現在は理工学部の 10 分の 1 程度ですが，計算機実習や福祉関係の実習の補助のために，年々増加しています。

4. TA の仕事内容

それでは，龍谷大学でのTAの仕事内容について説明します。理工学部では，基礎教育を重視した教育内容で，実験・実習や演習においては少人数教育で1回生から専門の基礎教育を行っています。TA の仕事の内容は，実験，実習，演習の際の，教員の補助です。

例えば，計算機の実習では，1 年生の最初から UNIX の初歩を，学生1人に1台のワークステーションで実習を行います。実習室には，一度に100人～140人の学生が入ります。教員が基本事項を説明し，それに基づき実習を行っていきます。20 人に 1 人程度の割合で TA がつき，学生の質問にその場で答えています。物理実験や化学実験についても，20 人に 1 人程度の割合で TA がつきます。

数学系の科目では，講義は全員一緒にやりますが，演習の際は 20 人以下に分割した少人数で行います。他の実習科目と異なり，部屋が大きすぎると数学の演習はやりにくいからです。講義と演習の連携を緊密に保つ為に，講義と演習は同じ教員が行います。教員が問題・解答をTA に事前に渡し，演習の直前に 1 時間程度打ち合わせを行い，演習の時間になるとクラスに分かれきめ細かく演習を行います。このとき，教員は，全部のクラスを回って全体の把握を行います。

龍谷大学理工学部に限っても，TA の仕事内容は担当教員により微妙に異なります。上にあげたものは，典型例のひとつです。

なお，教員は使用する部屋の形状についての希望は出しますが，演習のためのセミナー室の確保は事務の方でやっています。龍谷大学では，研究室・研究用の実験室については管理者が決まっていますが，講義室・学生用の演習室は学部をこえて事務が管理をしているからです。学生用の小さな演習室は文系の方でも使いますので，時間を調整して，理工学部もそれを使える訳です。

5. TA 制度の問題点

最後に，TA の問題点について説明します。つぎの 3 つがあります。

(1) TA の学力
(2) TA の人員確保
(3) 事務の手間の大変さ

各項目について順番に説明します。

(1) TAの学力　例えば，微積分，線形代数等の数学の科目においては，学生の質問に的確に答えることができる為には，その事項に関する十分な理解が必要です。しかしながら，院生だからといって，十分理解している訳ではありません。それを補う為に，演習問題に対する模範回答例を全部用意しておくことと，演習の前後にミーティングが必要となります。従来，助手が演習をやっている形態と一見似ていますが，TA の場合は事前の準備が大切で，担当教員は講義だけの科目にくらべ大変です。他の大学でよくやっている，TA にレポートのチェックを依頼するといった仕事に比べ手間がかかります。しかし，TA のねらいで述べたように，院生と学生と直接交流するということの大切さを考えて，手間はかかるけれども現在のシステムでやっています。関数論等のレベルの高い科目は，博士課程の学生や他大学の院生に依頼しています。

(2) TAの人員確保　入学する大学院生の数には，大きな変動があります。多すぎるのはいいのですが，少なすぎるときは，院生1人あたりのTA に従事する時間が多くなり本来の研究に支障が生じます。この場合は，他大学の院生に依頼し，なんとか対処しなければなりません。これまでは，なんとかやって来ました。現在，できるだけ大学院進学者を増やすように努力しています。

(3) 事務の手間の大変さ　本稿を作成するため，事務の方にいろいろと TA の状況を教えていただきました。事務としては，TA に相当時間を使っているということでした。約 200 人の TA の履歴書・契約書の提出，出勤簿の管理（時給で計算の為）および銀行への給与の振込といったことです。非常勤講師に比べ人数が一桁違うので大変であるということです。

おわりに

以上, 簡単に龍谷大学の TA 制度について説明いたしました。研究会に出席し他大学の様子を知り, 龍谷大学の TA 制度は他大学とはかなり違い例外的であるということが改めてわかりました。他大学のおもしろい試みも，いろいろと聞かせていただきましたがここでは割愛させていただきました。本稿が, これからのTA制度について考えるきっかけとなればと思います。

最後に, 研究会にご招待下さった, 西森敏之教授に感謝申し上げます。